群教セ	G10 - 01
	平16.220集

最後まであきらめない強い意志を育む道徳指導の工夫

── 生徒相互の信頼関係を深める活動と関連させて ──

特別研修員　遠山　昌史（新里村立新里中学校）

《研究の概要》

本研究は、道徳の時間と生徒相互の信頼関係を深める活動（学校行事）とを関連させることを通して、最後まであきらめない強い意志を育む道徳指導の工夫について、実践的に研究したものである。具体的には、学校行事への取り組みの中でクラスに確かな居場所を確保させ、その中で味わえた達成感・満足感から“やればできる”という自信をもたせ、何事にも最後まであきらめず頑張っていこうとする強い意志を育もうという実践である。

【キーワード：道徳　中学校　強い意志　学校行事　信頼関係】

Ⅰ　主題設定の理由

中学校３年生。進路決定という人生で初めて出会う大きな試練を目の前にして、誰もが少なからず不安を抱えている。勉強をやらなければならないことは十分に分かっている。ただ、分かっていながらも思い通りにはできない。その原因が自分の意志の弱さにあるということに気付かず、あるいは、気付かないふりをし、友達関係や異性や家庭での問題、学校行事との両立の難しさなどを阻害要因として現実を直視しない生徒も少なくない。日常生活で自分の思い通りにいかないことが発生すると、まず自分以外のところに原因を求めてしまう傾向にあるのが人間であるが、その原因の根底に流れるものは自分自身の意志の弱さである場合が多い。社会に出ると自分の思い通りにいかないことは多分にある。生徒たちには、たとえ挫折感を味わったとしても自分を投げてしまうことなく、幾多の障害に直面しようとも自分の意志を最後までねばり強くつらぬける人間に成長してほしいと願うのである。

そこで、まず体育大会、合唱コンクールなどのお互いの信頼関係を深める活動と関連させて道徳の授業を行うことで、一人一人にクラスの中に確かな居場所を確保させ、人間関係に左右されることなく自分らしさの発揮できるクラス作りをしていくことを考えた。信頼関係で結ばれた集団の中で自分の存在意義を肯定的にとらえさせることにより、自己理解を深めさせ、自己の可能性を伸ばしていこうとする意欲をもたせたいと考えたからである。さらに、集団で一つの目標に向かって取り組む活動を通して達成感や満足感を味わわせた後に道徳の授業を行うことで､失敗や挫折を恐れず立ち向かっていく自信や勇気を高めることを考えた｡そのことが、困難に屈しないで最後までやり抜く強い意志を育むことにつながると考えたからである。

以上の理由により、本主題を設定した。

Ⅱ　研究のねらい

道徳「自己の向上」〈１－（５)〉「強い意志」〈１－（２)〉において、生徒相互の信頼関係を高める活動（体育大会、合唱コンクール）と関連を図っていくことで、最後まであきらめない強い意志を育むことができるということを、実践を通して明らかにする。

III 研究の見通し

1　道徳「優勝の秘密」〔集団生活の向上〈４－（１）〉〕で、集団で一つのことを目標に取り組むことの意義を自覚させ、体育大会に臨ませることで、集団で一つのことを成し遂げるためには、お互いを認め合うことが重要であるということに気付くであろう。

2　道徳「頑張る理由」〔自己の向上〈１－（５）〉〕において、校内体育大会で実感できた達成感・満足感を振り返るとともに、資料を基に、勉強と行事の間で揺れる少年の悩みを自分のこととして考えることによって、どんなことにでも頑張ることが自分自身を向上させることにつながっていくのだということに気付くであろう。

3　道徳「わき役の力」〔集団生活の向上〈４－（１）〉〕で、集団で一つのことを成し遂げるためにはお互いの信頼関係が大切であることを自覚させ、合唱コンクールに臨ませることで、集団で一つのことを成し遂げた達成感を味わうには、お互いを認め合い信頼関係を深めていくことが重要であるということに気付くであろう。

4　道徳「１００万回のコンチクショー」〔強い意志〈１－（２）〉〕において、合唱コンクールで実感できた達成感・満足感を振り返るとともに、資料を基に、野口健氏が荒れた学生時代を過ごしながらもアルピニストとして成功を収めることができた理由を考えることによって、強い意志をもってあきらめず目標達成を目指そうという意欲をもつことができるであろう。

IV 研究の内容

1 基本的な考え方

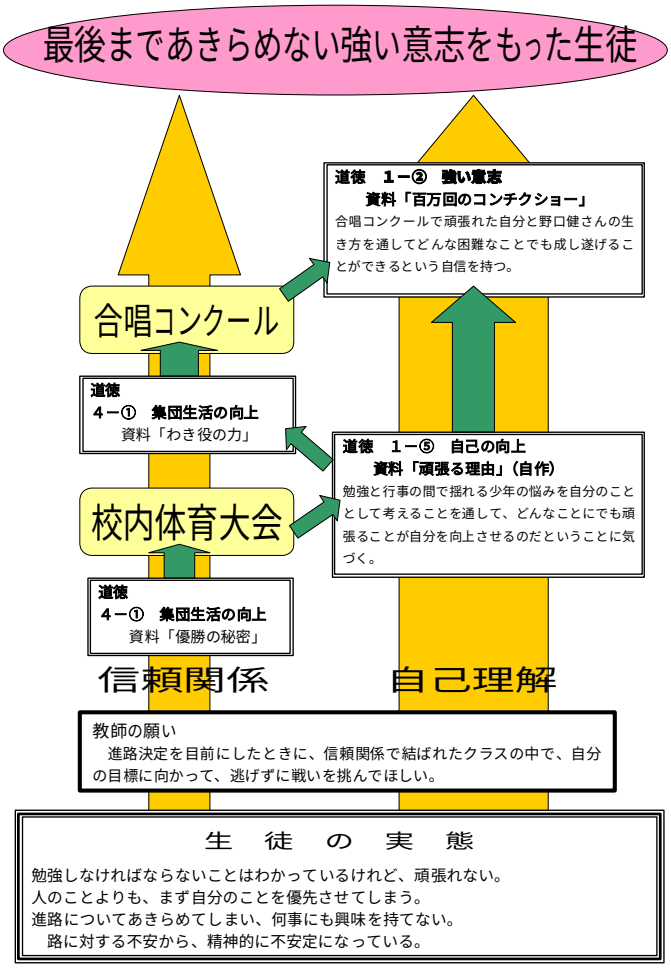
（１）「最後まであきらめない強い意志をもった生徒」とは

　自分に自信をもち、自分の可能性を信じ、目標に立ち向かったとき、目の前にどんな障害があろうと積極的に目標達成を図ろうとする生徒である。

（２）「生徒相互の信頼関係を深める活動」との関連について

　集団の中でお互いのことを認めることができ、かつ自分自身を集団に必要な存在であると自覚できたとき、そこは誰にとっても居心地のいい場所となる。クラスがそういう集団であることで、周りを気にすることなく、失敗を恐れることなく、自分らしく自分の力を発揮することができる。

　さて、生徒相互の信頼関係を深める活動として、一つの目標に向かってクラス



全体構想図

が一丸となって取り組む校内体育大会、合唱コンクールを考えた。これらの学校行事は、気持ちの持ちようや頑張りがそのまま結果に結びつくものであり、受験を意識し始め自分自身と向き合わなければならず不安定になる生徒の少なくない二学期に、クラスへの思いや頑張りをお互いに認め合える大切な行事である。頑張りを認め合えれば、もちろん信頼関係の深まりにつながるが、頑張れなかったり、失敗をしてしまった場合などでも、自己を深く見つめなおす良い機会ともなる。

校内体育大会で頑張れた自分や頑張れなかった自分を振り返りながら道徳「頑張る理由」を行うことで、結果はともかく頑張ったという達成感・充実感が次へのステップとなり、自己の向上につながるということを理解させる。そして合唱コンクールに臨ませ、途中で投げ出さず、最後まであきらめないで取り組ませ達成感・満足感を味わわせる。その後の道徳「１００万回のコンチクショー」において、自分自身を見つめさせることで、強い意志をもって何事にもあきらめずに頑張っていこうという意欲を高める。行事での体験を生かして道徳的価値を深めたり、授業で扱った道徳的価値を生かして行事に臨ませたりしながら、自己を見つめさせていきたいと考える。

2　実践の概要及び結果と考察

本学級の生徒（男子１７名　女子１７名　計３４名）は、人間関係を気にしたり、集団から外れることを恐れたり、周りを意識するあまり自分らしさを出せないでいる生徒が多い。

学級全体および抽出生徒のアンケートやワークシート、学級通信「元気魂」の原稿記述、および活動時、日常的な観察を通じて変容をとらえた。抽出生徒は、事前アンケートにおいてクラスは居心地がよくないと答えた生徒２名で、昨年度学習意欲のあまり感じられなかったＡ子、４月当初より孤立傾向にあり保健室登校の増えつつあるＢ子とした。

(１)　集団で一つのことを成し遂げるためには、お互いを認め合うことが重要であるということに気付くことができたか。

ア　実践の概要

体育の授業で体育大会の練習（長縄、全員リレー）を行う際に真面目に取り組まない生徒がおり、「まとまりがない」「やる気が感じられない」という不満の声を学級で耳にすることが多くなり、道徳「優勝の秘密」〔集団生活の向上〈４－（１)〉〕において、思い出に残る体育大会にするための話合い活動を取り入れ、クラスの団結力を高めようとする意欲をもたせ体育大会に臨ませた。資料は、過去に体育大会で優勝をしたクラスの作文であり、どんな気持ちで臨むべきか班に分かれて話し合い、発表し合った。

イ　結果と考察

話合いの中で①クラス一丸となる（チームワークをよくする)、②熱く燃える、③最後まであきらめないでがんばる、④応援し、励まし合う、⑤目標をもって頑張る、などの意見が出され、義務教育最後の体育大会を思い出深いものにしようと活発な話合いがなされた。翌日から長縄跳びの朝練習を行うことになり、クラスがまとまっていくために、一人一人が努力していこうという意識の高まりが見られた。大会終了後、「体育大会で頑張った人たち」ということで学級通信の原稿を書かせたところ「全員頑張っていた」という記述が多く見られ、「競技している人をすごく応援していた」や「長縄を回すのご苦労様」など、競技以外の頑張りやクラスのために頑張ってくれた人たちを認める記述も見られた。

以上のように、まとまりの感じられないクラスであったが、道徳での話合いを通して、応援に力を入れたり、競技の終わった仲間の頑張りをたたえ合ったり、クラスのまとまりを意識しながら体育大会に臨むことができた。Ａ子は、《体育大会に向けて》《体育大会の感想》の中で「後悔したくないから、一生懸命がんばる！楽しくやる」「スゴォォォォォい燃えまし

た」と記述しているが、“クラスとして”という内容の記述は見られなかった。Ｂ子については、道徳の授業を受けておらず、体育大会当日も欠席をしてしまった。

（２）　どんなことにでも頑張ることが自分自身を向上させることにつながっていくのだということに気付くことができたか。

ア　実践の概要

資料「頑張る理由」〔自己の向上〈１－（５）〉〕を基に、勉強と行事の間で揺れる「僕」に対してのアドバイスの言葉を考えさせた。次に、何のために体育大会や合唱コンクールなどの学校行事に頑張る必要があるのかを６つの班に分かれて話し合った。班でまとめた結論を各班の代表者の発表により聞き合った。その後、この１時間の授業で考えたことを書かせた。資料は自作であり、志望校が決まり勉強に本格的に力を入れようと思い始めた時期に、体育大会のリレーの選手に選ばれ朝練習に参加しなければならないという生徒の悩みを綴ったものである。勉強と行事の間で揺れ「なぜ行事に頑張らなければならないのか」と問題を投げかけた形式で終わっている。

イ　結果と考察

話合いの中で導き出された結論としては「後悔しないように。最後に笑えるように。自分の将来や目標のため。自分を成長させるため。（１班）」「団結を通して、信頼関係・友情を学ぶため。自分のため、みんなのため。（２班）」「団結して何かをすることは生きていくうえで大切なことだから。（３班）」などというものであった。また、感想の中では「頑張るということは、自分のためにとてもいいことだ。」「何かを一生懸命頑張るのは、いつか自分に返ってくるんだなぁ。」「みんなのために頑張ることが、自分を成長させてくれるんだなぁと思いました。」というような記述も多くみられた。

以上のように、体育大会直後の道徳「頑張る理由」において、なぜ自分たちは行事に一生懸命にならなければならないのかを考えることで自分自身を見つめることができ、次なる行事である合唱コンクールへの取り組みに対する意欲の向上にもつながった。

Ａ子が書いた授業後の感想には、「『がんばる』というのは自分の人生の中で大切なことをみつけるための第一歩だと思えた。」と前向きな記述が見られ、その後の合唱コンクールの練習も積極的に取り組む姿がみられた。ただ、まだ休み時間には保健室に行ってしまうことが多かった。Ｂ子については、この頃ほとんど保健室にいることが多く、道徳の授業も受けていない。

（３）　集団で一つのことを成し遂げた達成感を味わうには、お互いを認め合い信頼関係を深めていくことが重要であるということに気付くことができたか。

ア　実践の概要

やる気のある者とそうでない者との間の取り組みの差が見られ、さらに女子の間では人間関係の問題も発生し、合唱練習のたびに不満が募るようなクラスの雰囲気であった。道徳「わき役の力」〔集団生活の向上〈４－（１）〉〕において、映画作りにおいて陰の存在である衣装係がなぜ苦労を厭わないのかを考えさせた。資料は、映画監督山田洋次氏のエッセイであり、表舞台に立たない衣装係のエピソードにより、自分に与えられた仕事を精一杯にやることが映画の完成へとつながっているということを語っている。

イ　結果と考察

合唱中間発表会では、学年５クラスの中で一番出来が悪いと誰もが認める結果に終わり、やる気を失いかけていた生徒の多い中での道徳であったが、感想には「いい合唱をつくるために自分のできることを全力でしようと思った。」「わき役だから頑張らなくていいんじゃなくて、わき役でも頑張っていいものをつくろうとしないとだめなんだ。」「主役は大切だけれど、それを支えているわき役も大切だと思った。みんなが主役で、みんながわき役がいい。

支え合って行きたいと思った。」などに代表されるような記述が多く、もう一度、合唱コンクールに向けて一人一人が頑張っていこうという意欲をもつことができた。Ａ子は、それまでクラスの中に居場所を見いだせないでいたわけだが、授業後の感想では「自分が何をどうすればクラス合唱がよくなるのか、自分が今できることは何なのか、あらためて考えました。一生懸命やりたい。」と初めてクラスを意識した記述をした。

その後、朝練習や放課後練習はもちろん、休日練習を行うなどして、取り組んでいく過程で多くの生徒は少しずつクラスがまとまっていくことを実感できたようであり、毎日の生活ノートの記述などを読むと１回１回の練習の取り組みに一喜一憂している姿がうかがわれた。当日の朝練習には初めて全員がそろい、本番でもクラスとして悔いの残らない合唱をつくることができた。それは、合唱コンクール後の感想の記述にも明らかであり、最優秀賞に次ぐ優秀賞という結果ではあったが、やるだけのことはやったという達成感・満足感の読み取れるものであった。

以下は、Ａ子とＢ子のコンクール後の感想（抜粋）である。

Ａ子

がんばったけど、おしくも『優秀賞』でざんねんだった。絶対「最」優秀賞だと思ったのにスゴイ、いやだった。でも「せいいっぱい」がんばれたので、よかったと思った。（略）最悪のところから、ココまでこれたのはＥぐみの「力」だと思いました。だから、本当にすばらしいと思った。「感動しました！！」（略）Ｅぐみでよかったと思いました。くやし泣きじゃなくて、うれし泣きができればよかったです。

Ｂ子

（略）賞もとれたしうれしい☆だけど、正直心のどこかではすごく罪悪感を感じてるし、ちょっと複雑であるのが私の本当の心境。なぜなら、あまり練習に参加しなかったし、そのせいでクラスのみんなに迷惑かけてしまったからだ。だから、たまに練習に参加するのに、ちゃんとクラスの人は私を受け入れてくれるのか、歌詞・音程は大丈夫だろうか、私の立ち位置はあるのだろうか、急に参加したら周りの子の位置もかわるわけだからすごく迷惑かけちゃうだろうなとか、本当に心配だらけだった。だけど、練習に参加すれば温かく声をかけてくれたり、私の立ち位置をつくっておいてくれたり、クラスに受け入れてくれたり、こんな私でも３Ｅの一員だって思ってくれてるんだって実感して、すごくうれしくて、正直感動した。だからこそ私は合唱コンクールに向けてがんばろうって思ったし、家に帰ってからも歌詞を必死で覚えたり、ピアノで音程をとったり、今までの自分じゃ考えられない努力をした。結果は優秀賞だったけど、私は最優秀賞以上の合唱だったと思う。私は３Ｅになれて、３Ｅのメンバーで歌うことができて本当によかったと思う。だけど、最後に迷惑かけて本当にごめんね↓↓そして、本当にありがとう☆★☆

二人ともクラスは居心地がよくないと言っていた生徒であるだけにその変容には驚かされる。Ｂ子の感想は、“教室にあまり来なくてもＢ子の存在を認めていたクラスメート”と“認められていたことに心を動かし頑張ろうと思うことができたＢ子”の関係をうかがい知ることのできるものである。

以上のことから、クラス合唱を作り上げていく過程において、道徳の授業を行うことにより意識を高めていくことは、朝練習や放課後練習、そして休日練習などを行うきっかけ作りともなり、まとまりのあるクラス作りにつながった。

(４)　強い意志をもってあきらめず目標達成を目指そうという意欲をもつことができたか。

ア　実践の概要

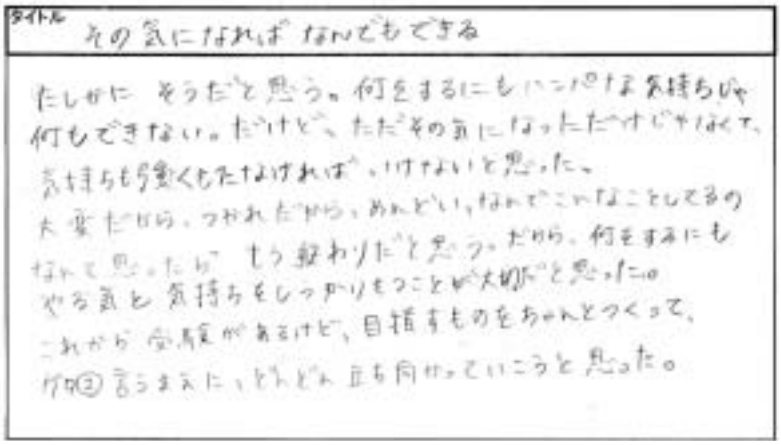
合唱コンクールにおいて自分たちの納得のいく合唱を作りあげることができた経験を思い返しつつ、道徳「１００万回のコンチクショー」〔強い意志〈１－（２）〉〕を行った。アルピニスト野口健氏が荒れすさんだ学生時代から７大陸最高峰制覇の最年少記録を樹立するにま

で至った成功の理由について、６つの班に分かれて話し合い、班でまとめた結論を代表者の発表により聞き合った。資料は野口健氏のエッセイを一部改作したものであり、上級生からのいじめを受け、荒れ、さらに大人への不信感を募らせた学生時代に植村直己氏の本と出会ったことによってアルピニストとしての道を歩き始めたという内容のものである。

イ　結果と考察

合唱コンクールで義務教育最後の学級対抗の行事を終え、次なる目標は「受験」ということになった。「荒れていた野口健さんがアルピニストとして成功できたのはなぜか」という中心発問に対して班ごとに話し合った。そして、「自分は絶対に変われると信じていたから。悔しい気持ちをバネにして頑張った。（１班）」「やってやるという気持ちが強かった。（３班）」「自分に負けたくないという気持ちがあった。あきらめない気持ち。（４班）」などが発表された。また、授業の感想では「野口さんのように強い意志をもって、何かを成功させることのできる人間になりたい。」「いつもその気になれないでいた自分がいた。けれど、合唱コンクールでその気になれて、優秀賞がとれた。昔はただやる気がなかっただけで終わらせていたけど、今回の道徳で『その気になれば何でもできる』という大きな意味がわかった。」という記述に見られるように、受験に向かって、あるいは夢に向かって前向きに取り組んでいこう、今の自分を変えていきたいという内容のものが多かった。その後、休み時間に問題を解いていたり問題を出し合ったりして学習している生徒の姿が見られるようになった。

抽出生徒についても前向きな記述であった。右はＢ子の感想であるが、合唱で頑張れた自信から自分の今後を見つめる機会となり、私や養護教諭に進路についての相談を持ちかけるようになった。


タイトル　その気になれば なんでもできる

たしかに そうだと思う。何をするにもいっぱいな気持ちじゃ何もできない。だけど、ただその気になっただけじゃなくて、気持ちも強くもたなければいけないと思った。
大変だから、つかれたから、めんどくさいなんでこんなことしてるのなんて思ったが もう終わりだと思う。だから、何をするにも やる気と気持ちをしっかりもつことが大切だと思った。
これから受験があるけど、目標をちゃんとつくって、
がんばって言うまえたっとどんどん立ち向かっていこうと思った。

以上のように、合唱コンクール後の道徳において、偉業を成し遂げた人物と達成感・満足感を味わった自分を重ね合わせて考えることで、今の自分の抱える問題を見つめなおし、今後の生き方について考えることができた。

Ⅴ　研究のまとめと今後の課題

１　研究のまとめ

○　バラバラであり、まとまりがないと感じている生徒が半数近くいたクラスが、体育大会、合唱コンクールへの取り組みの中で生徒相互の信頼関係を深めていったわけであるが、“クラスの一人一人がお互いに認め合っていこう”そして“そんな信頼関係の中だからこそ何かに打ち込んだ後、より大きな達成感・満足感を味わえるのだ”ということを意識させるために道徳の授業は有効であった。

○　行事を経験していく中で“やればできる”という自信をもたせた後、道徳の時間において偉業を成し遂げた人物と自分を重ね合わせて自己を見つめさせたことは、どんなことにでも最後まであきらめないで取り組もうという強い意思を育むことにつながり、その後の生徒の取り組みに変化が見られた。

○　クラスに自分の居場所を見出せなかった生徒も、今回の実践の中で、行事に向けて取り組

んでいく過程を通して自分の居場所を見出すことができたり、クラスの仲間から自分の居場所をつくってもらえたりしたことにより、自分に自信をもち前向きな考えをもてるようになった。

2　今後の課題

○　今回の研究で実践した、学校行事で“自分はやればできるんだ”という自信をもたせ、それを進路決定に挑む原動力にする試みは成功であったと言える。が、生徒たちのもった自信も確実なものとは言いがたい。まだ成長の過程にあり必ず不安定になるものである。今回の実践でのワークシートの記述や一人一人の活躍の場面などを折に触れ振り返ることができるような工夫を行いたい。

○　この実践は３学年で行ったものであるが、１年次より学校行事と道徳を関連させて行い、クラスの中に自分の居場所を確保させることによって、生徒たちの可能性をより広げていくことができるのではないかと考える。

〈参考文献〉

大鐘　雅勝　著　『イキイキ道徳授業を創ろう』　明治図書（１９９３）
赤坂　雅裕　著　『道徳授業奮闘記－燃える中学生－』　明治図書（１９９５）
野口　健　著　『落ちこぼれてエベレスト』　集英社インターナショナル（１９９９）
野口　健　著　『１００万回のコンチクショー』　集英社（２００２）
桃﨑　剛寿　編著　『中学編　とっておきの道徳授業』　日本標準（２００３）
桃﨑　剛寿　編著　『中学編　とっておきの道徳授業　Ⅱ』　日本標準（２００４）